

大学図書館界の動き

国立大学図書館協議会の総会開催

6月3日から5日まで、千葉を会場にして、本年度の総会が開催された。昨年の総会で、組織および活動をより強化するため、これまで全国国立大学図書館長会議と称していた名称を変更し、組織も大巾にあらためた。本年度総会は、組織変更後の最初の総会であった。

第1日の午前中は、理事会その他が開かれ、総会は午後から始められた。1年間の各種の報告および予算・決算の承認後、夕方より文部省の詳細な事務連絡があった。

2日目の午前は、各種委員会の報告と討議、午後は地区提出議題を3つの分科会にわかれて討議した。3日目の午前中は研究集会で、本年のテーマは、「事務量調査に基づく定員の問題」で、東北・東京農工、小樽の3大学から報告があり、質疑討論が行なわれた。午後の総会では、昨日の分科会の報告があった後、とりまとめの討論が行なわれた。

本年度の総会の特色は、揺れ動く大学像のもとにあって、大学図書館はいかにあるべきかという問題に論議が集中したことである。もちろん、簡単に結論を得られるべき問題ではないので、今後協議会としても、この問題に積極的に取り組むことになった。来年度の総会は、本館がお世話することになった。本年の経験を積極的に生かしていきたいものである。

新入生から要望などを募集

——附属図書館・教養部図書室——

去る6月2日から11日までの10日間、附属図書館の大閲覧室・第二閲覧室、教養部図書室において、新入生から要望・意見・質問などを募集した。その結果、附属図書館で1名、教養部図書室で2名の回答があった。前者に対するのはレインコートもかけられるロッカー設置の要望であり、後者に対するのは開架式（利用者が直接自由に手にふれることができる）図書の設置、現在1冊である貸出し冊数の増加、傘立て設置の要望であった。

附属図書館への要望については、関係者審議の結果、ロッカーを設置するとすれば相当数のものでなければ効果がないが、現在紛争校に指定され満足な予算が来ていず、また設置スペースの点でも問題があるので、本年の実現は無理である。しかし、今後、前向きの姿勢で何とかその可能性を求めているという結論に達した。

教養部図書室への要望については、該図書室では深重な検討を要するものがあるので、図書委員の教官と相談の上、結論を出し、何らかの形で回答するはずである。

大学図書館職員養成制度について訴える

小 国 健 一

大学図書館職員の養成については、今日まだその十分な養成制度が一ごく1部の例外をのぞき一確立されていないため、大学図書館界が緊急に解決を迫られている課題の中でも、きわめて深刻なものとなっている。国の唯一の図書館職員養成機関は短期大学であり、各大学に昭和30年頃から設けられている図書館学の講座（夏期講習会形式のものも含めて）は、主として一般公共図書館の職員の養成を目的としたもので、大学図書館職員の養成には満足なものではない。これらの機関の卒業生たちは、整理技術をふくめた図書館学の知識をそなえているが、専門書を中心として取扱う大学図書館では十分な活躍を期待できない面がある。

私が10年間勤務した文学部図書室での主に整理面での体験を考えると、はやい話が、年間何千冊かの漢籍が受入れされてくるが、漢文の読解力がなかったら、いかに適確な整理技術をもっていたとしても、どうして図書の目録を作り、分類をすることができようか。草書や変体仮名が読めなくては一日本の古書について、またしかり。和漢書以外では世界各国語のものが受入れられてくるのに、アラビア・ペルシヤ語などになると、めったに教授してくれる機関もない。

さらにもっと基本的に考えてみると、利用のために整理するわけであるが、利用者の立場に対する理解を欠いては、これは全然ナンセンス—というのが理の当然であろう。したがって学問についての大略の知識を有することは大学図書館職員にとって不可欠の前提条件といえる。私は文学部の経験しか有しないので、他部局の図書室については同日に論ずるつもりはないが、この基本的な考えについては誤っていないと思う。

今や大学図書館職員養成制度の確立は時を失することのできぬものとなっている。本年はじめて文部省は国立大学図書館の中堅職員を対象に、人文・社会系 10名、数学・物理系 10名、化学・生物系 10名とわけて、8月初めに3週間の再教育を行なうとのことであるが—これは従来の「大学図書館員講習会」の4日間よりは画期的に長期ではあるが—3週間位で私の上述したような欠陥が克復できるだろうかと危ぐをもっている。簡便な法として、業務上必要を認められた者は学部の関係授業を聴講できるようなシステムもあると思うが、大学改革の波が高まっている折柄、この制度のこともぜひ洩らさぬよう考えていただきたい。

(附属図書館 書庫掛)

在米邦人園田平次郎氏より秘蔵の切手コレクションと 図書館学関係図書寄贈される

「前略 貴校盛栄敬賀の至りに御座います。小生幸ひ余世をアメリカに送っております。御休心。突然の申出であります。在米六十余年老千九百〇六年（明治三十九年）から郵便切手ユーズドを蒐集して来しました。……（原文のまま、以下略）」この書き出しではじまる昨年5月16日付け合衆国ワシントン州スポケン Spokane 市から寄せられた京都大学宛ての手紙が発端であった。この手紙によって、文中にもあるように、氏が60余年間働き蜂のようにして収集された総数4,854枚にのぼる珍重な切手コレクションが附属図書館に寄贈されることになった。切手は1853年から始まる1800年代のもの数百枚をふくめ、第一次世界大戦前後30ヶ国に及ぶものが重きをなしている。

第二次大戦時の日本人所持品調査にさいして、紛失をおそれ、紙にベタ張りにしたものを氏自らの手で製本された2冊の切手帳が送られてきたのは6月8日であった。

さらに園田氏からは“Scott's standard postage stamp catalogue” (call number 8-3 S16) が届けられ、また300ドルにのぼる希望図書の寄贈が申し出られた。この申し出に対して図書館学関係の図書を選定し、昨年11月20日、本年4月19日の2回にわたり合計40冊の発注を行ない、氏のご好意による図書はぞくぞく附属図書館に到着し利用を待っている。

